

## とんぼのめがね

## 【使徒の働き学び】(67)

## 「堂々として王の前で証しする」(使徒26:1-23 ルカ21:12-15)

「しかし、これらのことすべてが起る前に、人々はあなたがたに手をかけて迫害し、会堂や牢に引き渡し、わたしの名のために、あなたがたを王たちや総督たちの前に引き出します。それはあなたがたにとって証しをする機会となります。ですからどう弁明するかは、あらかじめ考えないで心に決めておきなさい。あなたがたに反対するどんな人も、対抗したり、反論したりできないことはと知恵を、わたしが与えるからです。」(ルカ21:12-15)

イースター礼拝の前、使徒の働きについて学んだのは、総督フェストゥスがたまたまカザリアに訪問していたエタヤ最後の王とも呼ばれるべきアグリッパⅡと、その妹ベルニケとをパウロに面会させたことを学びました。フェストゥスの目論見は、パウロが無罪をカイザルに上訴したことからパウロをローマへ移送する際、皇帝にパウロの罪状を明確に報告する必要があり、アグリッパⅡ王とパウロとのやり取りの中から、その論点を採りたいとの思惑があったと思われます。パウロとしても今までエタヤ民衆に対して、エタヤ議会とその指導者たちに対して、そしてローマ総督に対して弁明して来ました。彼の弁明は、彼のエタヤ教からキリスト教への転向の経緯を語ることで、それは即ち、彼の回心の証しそのものであります。パウロの回心の証しは、使徒の働きの中での回語られている。9章(1-11)、22章(1-22)、そして26章(9-18)である。最初の9章は、ルカの叙述で、ステパノ殉教の後の歴史的事実として書かれていて客観的な描写である。22章と26章は、パウロ自身が語ったことはが記述されていて、ほとんど同一であるが細部に相違がある。私たちが経験があるが、同じ事を話しても詳細な点で差違が出るのが真実味があるように思うのである。今回のアグリッパⅡ王の前での証しが、王の前だけに最もいい敬語を交えて話されている。キリスト者は、救われた明確な証しを持つ人は幸いである。この「明確な」という表現は語弊がある。以前にもお話ししたことがあったが、体験としての証しには2種類の型がある。ひとつは、このパウロ型とも言うべきもので、その回心の時や場所、情景まで明確であるもの、もう一つは、救われた事実は明確だが、そこに至る経緯が長いプロセスがあるもので、2世3世のキリスト者が多いタイプである。僕などはその後者の典型だが、僕の父などは、前者の典型であった。19歳で救われ、その後の信仰の試練の証しである。戦争、敗戦、起業、聖日厳守母の死、そして信仰の深化のプロセスと明確な信仰体験は、パウロの回心の証しのように何度も何度も繰り返され、僕も身に77が出来るほど腐かされた。今日のテキストとして、使徒の働きとは別にルカ福音書21:12-15を挙げた。これは主イエスの私たちに預言的、遺言的とも言うべきおことばである。この預言は、パウロの今日の場面で成就していると思う。パウロは正に総督や王の前で証しをしている。エタヤの最後の王となる人の前で証しすることなど、直前までパウロの思いも及ばな事だったろうし、主イエスは、「その時は突然来る。何を語ってよいか、準備などできない。しかし、私が語るべき言葉をあなたがたに与えるから心配することはない」と主は言っておられたのである。パウロは、王の前に立ったとき、思わず手を上げたのである。それは以前、騒ぐ群衆に対して、手を上げ制止したのとはちがって、敬意を表すために手を上げたのだと思われる。彼は、王の前で話ができる幸運を神に感謝しているのである。パウロは今まで何度か話して来た人々とは違った安心感のような落ちつきと、親戚感

を覚えたことでは。今まで対処してきた相手は、パウロに敵意を持つユダヤ教指導者たちで、また殺意をむき出しにした群衆であった。そんな相手にもめげずに彼は勇気を振って自分の証をした。マジと怒号の中で語るのは何と疲れることだろう。また徹岸不遜な敵意にみちた祭司長やパリサイ長老たちと対峙して話すのも、激のような倦怠感にみだされたことだろう。またローマ総督の前では、彼らにとっては無味乾燥に思える信仰への態度に接しつつ福音の証しをするとき、まるで「糖に釘を打つ」の虚しさを感じたことであろう。しかし大いに威儀を正し、虚飾を感じさせる王であっても、伝統あるイスラエルの王で、ユダヤの儀礼や習慣に通じ、しかもヘニスム的教養も豊かに持った王と語るとき、パウロは今までになかった安心感と共感にみちて彼に話すことができたのではなかったでしょうか。敵意なく、好奇心を持って聞いてくれる人と話すときほど、話し手が心安らぐものはないわけです。パウロは、ていねいに敬意をこめて話し始めました。彼は自分がユダヤ人として、厳格なパリサイ人として育ったことから話し出しました。そして、なぜ今、自分が迫害されているのか、その理由を単刀直入に伝えています。それは、私たち12部族のイスラエルがと親密さをこめて、語っています。私たちの共通の先祖アブラハムのおかげで、神から約束された希望に生きて来ました。その希望とは、「神が死者をよみがえらせると言うことです」と開口一番宣言します。それについて、パウロ自身も初め、その方がイエスキリストであると分らなかった。解らないだけでなく、その信仰が異端であると信じ、真理である方を迫害し、のろつて来たのです。そして自分は、その攻撃の先頭に立っていました。とパウロは告白します。そして、あの「ダマス」での経験が語られます。「王さま、私は、キリスト者たちを間違った異端のやからだと思い、祭司長から添状をもらい、ユダヤ・サマリヤはあらか外国の、シヤのダマスまで彼らを捕えようとやって来ました。すると、あのシヤの焼けつくような太陽が中天にある真昼とき、その太陽よりも遙かに輝く光が私たちに射し、私は落馬して地に倒れると、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きました。思わず「主よ、あなたは誰ですか!」と尋ねると、「わたしは、お前が迫害するイエスである。トゲあるむちに逆えば、自分が痛いなるだけだ」(猪作の牛が主人に逆うこと)と云う声。「それは、十字架にかかり死に復活されたイエスキリストだったのです。復活されたイエスが私に現れたのです。そして、あなたは、復活した私、イエスキリストと全ユダヤばかりが異邦の地の果ての人々にまで伝えるために、私が選んだ器である」と言われ、その時以来、私は、世界中に、この復活のキリストこそ、メシア(救い主)だと伝えています。私は、小さい人にも大きな人にも、王さまから下は奴隷に至るまで、ユダヤ人も、ギリシヤ人も、ローマ人の差別なく、この「道」を伝えて来ました。私の望みは、王よ、あなたも私のようになってほしい事です。」と語ったのです。「これは、夜の幻や夢でなく、真昼の光の中で起きたことであり、万人の証人がいる歴史上の事実なのです」とパウロは語ったのです。パウロが語った事を信じる時、次のようなプロセスが心に起きます、①霊的な心の目が開かれ、②真の光を見い出します。そして③心は180度の転換(回心)をします、④自分の罪が赦され、⑤自分が進む道が示されます。そして⑥主キリストを証詞する生涯に入ります。⑦パウロが証しているように、神は、ユダヤ人たちの陰謀を砕き、その命を守護されたように、私たちも、聖霊の守りの中に生きて行くのです。パウロが王に主張したのは、彼は自分が発明した、自新(い)事をしたのでは無く、モーセや預言者が教えていることを、そのまゝ伝えていると云うことです。旧約聖書全体が、イエスキリストこそ、来るべきメシア(救い主)であることを証しているからです。「堂々と王の前で証しするようになる」とはパウロにだけ成された主イエスの預言ではありません。今日の主の復活を信じる私たち一人一人にも約束されている、主キリストのことはなのです。